

金城聖文（第二期生）

略歴

- 2000年 東京大学大学院医学系研究科 医科学専攻
修士課程入学（二期生）
- 2002年 同修士課程修了
- 2003年 日本学術振興会 特別研究員（DC）
- 2006年 東京大学大学院工学系研究科
先端学際工学専攻博士課程修了（工学博士）
- 2006年 株式会社ボストン・コンサルティング・グループ入社
- 2016年 同パートナー&マネージングディレクター
- 2018年 ペプチドリーム株式会社 取締役副社長



理系人材よ、ビジネスを動かせ！

「末は博士か大臣か」。かつて子供の将来に期待を込めて語られた言葉だが、最近は死語になりつつあるようだ。また、私の学生時代には、博士課程修了後のキャリアへの不安から「末は博士か、博士は末か」とも揶揄され、研究は好きなのだがはたして博士課程に進学してよいものか悩む学生も多かった。私自身も悩める学生の一人だったが、医科学修士課程に在学中、米国ニューヨーク州にある研究所へ短期留学させて頂いた経験が、博士課程に進学すること、そしてビジネスの世界でチャレンジしたいと考えるきっかけとなった。

渡米するのは初めての経験だったこともあり、多くのことが新鮮に感じられた。新進気鋭のサイエンティストが集まる研究所の雰囲気は、とにかく自由でオープン。ビジネス経験を有する研究者も多く、アカデミックな研究者たちもまた、研究の先にあるビジネスの可能性について熱い思いを語り合っていた。理系や文系の棲み分け意識もなく、キャリアに対する考え方も多様で、風通しの良さを感じた。何だろう、このワクワクする感じは。サイエンスがある程度積み上がってくるとイノベーションと呼ばれるようになり、求心力をもつようになる。ヒト・モノ・カネが集まってさらに求心力を高め、世の中を変えるほどの力をもっていく。イノベーションを形にする仕事がしたい、そう思う契機となった。一方、自分が思い描く仕事をする上で、博士号取得は必要条件であることも理解した。海外では、日本よりもずっと学歴社会であり、特にライフサイエンスの分野では博士号は必須ライセンスのようなもの。

博士課程を修了し、しばらく大学で研究員として勤務した後、企業経営に関する戦略コンサルティング会社に入社した。当時は、ハードワークの代名詞とも言われた業界でもあり、修行のような毎日だった。とにかくがむしゃらに仕事をしたが、その経験から得られたものはかけがえのない財産となった。会社の先輩にビジネスを成功に導く秘訣を問うたところ、「ビジネスは経験からしか学べない。結果を出している人と一緒に仕事をする。その人の経験を一緒に経験することで、その感覚を身につけるしかない。それがビジネスセンスだ。」今でもその通りだと思うし、ビジネスに

限らず、多くのものに通じるのではないかとも思う。

日本の基礎研究は、世界的にも高い水準にあると言われるが、そこから生み出されるイノベーションやビジネスは、必ずしも優等生とは言い難い。「技術で勝ってビジネスで負ける」のはなぜか。片手間ではなく、本腰を入れて（本気で）ビジネスをやる理系人材がまだまだ不足しているのが一因だと私は思う。その逆もおそらく真であるように、本業として研究をしながらビジネスをやって成功するのはなかなか難しい。

医科学修士での学びは私自身の大きな礎となっている。東大病院での各診療科実習では、回診後に臨床ドクターが、臨床医としてできることには限界があること、基礎医学の発展を待ち望んでいる患者さんが多くいることを話しながら涙していた姿が忘れられない。研究のみならず多様なキャリアに対する懐の広さにも心から感謝している。また、多様なバックグラウンドの同級生や研究室で大変お世話になった諸先輩方、後輩たちとのご縁は何より得難い財産だ。

これから医科学修士課程への進学を考えている方、もしくは在学中の皆さんにとって、医科学修士での経験が、将来の多様なキャリアの可能性を考える契機となれば大変うれしく思います。そして、身に付けた知識や経験を活かして、ぜひユニークでおもしろいサイエンティスト（理系人材）になって欲しい！そう願っています。